学界消息

史学研究会関係

昭和三五年度史学研究会大会

例年の通り昭和三五年一一月一日（火）二日（水）の両日にわたって開催した。第一日見学会は、京都大学柴田実氏の解説のもと、御上神社・彦根城・開国記念館・美術館・多賀神社・胡宮神社と近江湖東地方を巡回した。第二日総会及び大会は、京都大学楽友会館において開催。総会は織田武雄理事より会務・会計の報告があり、ついで別項会告の通り財団法人史学研究会の設立、財産処分及び役員改選の件が、万場一致で承認された。公開講演は、東京大学教授竹内理三氏、京都大学教授森鹿三氏により、次の演題で行なわれた。

居延漢簡について　森　鹿　三氏

武士団の発生　竹　内　理　三氏

宮崎理事長の外遊

宮崎市定理事長には、フランス・ソルボンヌ大学の招きにより、東方学の講義のため昭和三五年一〇月二七日出発された。帰朝は本年六月末の予定。

一二月例会

一二月三日（土）午後一時より見学会

京都の伝統産業をさぐる

——西陣織と清水焼——

講師　西村睦男氏

国史関係

読史会秋季大会

一一月三日（祝）　於京大文学部第七教室

土倉について　三浦　圭一

律令制地方支配組織の確立　八木　充

和州宇知郡新町村について　朝倉　弘

——元和九年の屋敷割帳等による——

佐賀藩の点役方小庄屋　城島　正祥

魏志倭人伝行程記事の解読　牧　健二

熊本洋学校について　杉井　六郎

関妃殺害事件について　山本　四郎

銅鐸の使用者について　田中　巽

志賀重昂について　岩井　忠熊

鎮花祭について　五来　重

御咄衆林道春　今中　寛司

大化前代の田制について　赤松　俊秀

終了後、午後五時より紫明荘において懇親会を開き、約五〇名が参会した。

読史会一二月例会

一二月一〇日（土）　於京大陳列館演習室

中世の労働編成に関する一考察　大山　喬平

覚禅の念仏信仰　中野　玄三

日本史研究会大会

於立命館大学清心館

個別研究発表　一一月一九日（土）

大同期における政治的動向　佐伯　有清

——伊予親王事件を中心として——

東大寺の周防国衙支配　藤本　進

——大勧進を中心にして——

秋田藩成立期の家臣団　山口　啓二

合法無産政党論　犬丸　義一

大政翼賛会　木坂順一郎

——天皇制のファッショ的再編成——

共同研究報告　一一月二〇日（日）

「歴史変革の主体と条件」

部民制の構造　上田　正昭

——特に祭祀組織を中心として——

鎌倉時代の領主制　工藤　敬一

近代的社会観の形成　安丸　良夫

大正デモクラシー期の政治過程

——普通選挙問題について——　松尾　尊兊

東洋史関係

旧制大学院例会
一〇月八日（土）午後二時　陳列館会議室
明代監生の出自について　谷　光隆
一一月一二日（土）
唐律語彙解　中谷　英雄
一二月一〇日（土）午後二時　神戸屋
均田制下の女子の地位　善峰　憲雄
新制大学院例会
一〇月四日（火）午後五時　神戸屋
顔之推の人と作品　吉川　忠夫
一〇月一八日（火）午後四時
文学科第四演習室
宋代開封の商人　小野寺郁男
一一月一五日（火）午後四時　楽友会館
漢代の孝廉について　永田　英正
一二月六日（火）午後五時　楽友会館
唐代使職の成立について　礪波　護
一二月一三日（火）午後一時　史学科会議室
(1)　今年の成果と反省
(2)　大学院制度についての諸問題
東洋史談話会大会
一一月三日（祝）午前九時～午後五時
京大人文科学研究所講堂
御題棉花図の成立　寺田隆信
青苗法施行の由来について　草野　靖
南朝の租調と両税法　古賀　登
清代江西省に於ける運輸業の構造　横山　英
広東コンミューンの一考察　衛藤藩吉
李汗伝説について　羽田　明
泉州イスラム碑石について　東　庄平
ガザン・ハンの改革　本田実信
漢代における太原郡について　増淵龍夫
宋朝国史の食貨志について　周藤吉之
水経注の寿春導公寺　塚本善隆
晩餐会　午後五時～七時　同所ホール
なお、同日、東洋史研究会総会並に評議員の改選が行なわれ、会長に宮崎市定氏、副会長に田村実造氏が選出されました。
人文科学研究所開所記念講演会
一一月一九日（土）
遊牧の歴史と実体　岩村　忍
京大人文科学研究所
東大東洋文化研究所　交換講演会
一二月八日（木）
沖縄をめぐる法的地位　植田　捷雄

西洋史関係

恒例の西洋史読書会大会は二十八回目を迎え、十一月三日に楽友会館でおこなわれた。発表者ならびに演題はつぎの通りである。
ホモノイア考　池田　忠生
ドイツ中世の教会フォークタイについて　瀬原　義生
ビザンツ帝国後期の都市について　渡辺　金一
封建社会研究の今後の方向　鯖田　豊之
フィレンツェ・プラトニズムにおける人間主張　片山　佳子
中世末期南ドイツ地方における農業労働者
――農民戦争との関連において――　前間　良爾
十六世紀前半におけるイタリア人の意識　永井　三明
確立期イギリス絶対王政とギルド　田村　満穂
一八・九世紀ドイツにおけるマニュファクチュアについて　大島　隆雄
ロシア独占体の性格　国本　哲男
ゲーテとマイネッケ　高橋　巌
ヨーロッパ精神の一考察
――展開と発展――　井上　智勇
なお研究発表終了後には懇親会が開かれ、名古屋大学北村忠夫氏によるドイツ紀行談

が、スライド上映をかねて披露された。

人文地理学関係

人文地理学会　一九六〇年度秋季大会
（日本地理学会と共催）
一〇月三〇日～一一月二日
於岡山大学・岡山県庁

シンポジウム「都市的土地利用と農村的土地利用の競合」
公的資料における土地利用区分　大久保武彦
東北地方における都市近郊の農地潰廃　横山　弘
農業的生産力の計測と工場団地想定地の検出　伊藤郷平・松井貞雄・井上和雄
東京西郊小平町における都市化と土地利用　内田　実
埼玉県南部における都市的土地利用と農村的土地利用の競合　村本　達郎

シンポジウム「近世都市と交通路」
周防大島における小松港の発展と開作港の変貌　福原　博
東海道の宿場町　佐々木清治
中山道における脇道往還の発達と宿場町について　原沢　文弥
辺境における近世都市と交通について　押野　昭生
江戸・大阪の大商圏とその変貌　黒崎　千晴
近世都市と交通路の特質　藤岡謙二郎

シンポジウム「臨海工業地域の形成」
臨海地域における鉄鋼業地帯の形成　山口　貞雄
北海道における臨海工業地域　伊藤　久雄
内湾工業地帯の地域性　小椋　憲臣
東京湾臨海工業地域の形成　小沢　利雄
京葉臨海工業地帯における第二次・第三次人口集中について　菊地　利夫
伊勢湾臨海工業地域の形成　光岡浩二・三浦総子・船橋泰彦・伊藤喜栄
大阪湾頭の臨海工業地域の形成　木原　孝三
臨海工業地域の形成——兵庫県の場合——　山崎　禎一
臨海工業地域の類型とその特質　檜垣　松夫
瀬戸内海沿岸における工業の発展と地域構造　村上　誠
水島工業地域形成に伴う諸問題　藤森　勉

人文地理学会第39回例会
十二月三日　於立命館大学

臨海工業地帯の形成——四日市の場合——　谷岡　武雄
ニチオピア高原とアジスアベバ　浮田　典良
沖縄の村落

考古学関係

日本考古学協会第二六回総会
一〇月二九日—三一日　大阪市立美術館

公開講演
奈良朝以前の東北　伊東　信雄
建築遺跡調査の問題点　浅野　清

研究発表
佐賀県多久三年山石器時代遺跡について　杉原荘介・戸沢充則
長崎県直谷岩蔭遺跡　芹沢長介・鎌木義昌
長崎県福井岩蔭遺跡　鎌木義昌・芹沢長介
青龍刀形石器について　江坂　輝弥
北陸における中期縄文式土器の一型式　寺村　光晴
新潟県西蒲原郡猪立遺跡の調査　永峯光一・上原甲子郎・礎崎正彦
長野県柳又遺跡第1次調査概要　樋口昇一・森島　稔
山口県豊浦郡豊浦町無田遺跡及び付近遺跡

種子島西之表市本城遺跡の調査概報　国分直一・盛園尚孝・重久十郎
山口市美濃ヶ浜遺跡の調査　小野忠熙・近藤義郎・潮見浩・藤田等・本村豪章
横穴に関する若干の問題　山本清
千葉県八日市場市塚原古墳群の調査　丸子亘
静岡県浜北町内野権現平山第7号墳　下津谷達男
若狭大飯町における師楽式の編年と製塩用と推定される炉址　石部正志
奈良県桜井市メスリ古墳（第2次調査）について　伊達宗泰・小島俊次
日本に残る仏足石の文様　佐々木利三
摂津伊丹廃寺址の発掘調査　田岡香逸・宮川秀一・高井悌三郎

見学会

南河内地方の諸遺跡

会告

去る昭和三十五年十一月二日開催の会員総会におきまして、昨年十月二十日開催の理事会、及び十一月二日開催の評議員会の議決が、何れも次の通り万場一致をもって承認されましたので、お知らせいたします。

(一) 財団法人の設立および財産処分について

史学研究会の事業は、各位の御協力・御支持によりまして、順調に発展しつつありますが、しかし乍ら財政的基礎は今なお不安定で、文部省研究成果刊行助成金の交付をうけて、漸く「史林」の発行を維持している状態であります。その助成金の交付も、将来は保障されない状態でありますので、次の要項により財団法人を設立し、これに伴ない財産を処分いたします。

(1) 京都大学文学部史学科関係教官の寄附金を中心に百万円の基金を設定し、その果実をもって事業を援助するため、財団法人史学研究会を設立する。

(2) 史学研究会の現有財産は、財団法人にひきつぐものとする。

(3) 財団法人の設立許可申請は、昭和三十六年四月一日発効を目標として行なう。

(二) 解散・財産処分の手続および財団法人設立手続の理事会委任について

この件については、会則により評議員会および会員総会の承認を必要とするが、これを、理事会に委任する。

なお、右の承認に基き、昭和三十五年十二月一日開催の理事会におきまして、設立代表者織田武雄氏および設立準備委員四名を択び、同じく十二月十日設立発起人総会を開催、十二月二十三日付をもって設立許可申請を行ないました。

(三) 役員の任期満了にともなう改選について

現役員の任期は、本年三月三十一日を以て満了するが、財団法人の設立許可が本年四月一日より遅延した場合は、設立許可の日まで留任するものとする。

昭和三十五年十一月

史学研究会

一　会員名簿についてのおわび

四三巻四号の会告にて、昨年末をもって会員名簿を作製する旨予告し、各位の御協力をいただきましたが、右会告の通り本年四月一日を以て財団法人史学研究会が発足予定となりましたので、本年四月一日現在を以て会員名簿を作製することに変更いた

しました。御了承下さい。

一　会費納入についてお願い

本年度の会費納入状況は、当方の予想を大幅に下廻つて、全く不振を極めております。会費不足金のある方は、至急御納入下さるようお願いいたします。

史学研究会

編集後記

本号より本誌の論文・研究ノート類の掲載はすべて日本史・東洋史・西洋史・地理・考古学の順、各学科内部は時代・地域順とすることになりました。本会の性格からして委員会に特定のイデオロギー的価値基準があるわけはなく、個々の委員の主観的判断によつて編集が左右されえないとすれば、いきおい論文の判定は「純粋学術的な見地」によらざるをえません。そのような見地の存否はともかくとして、増頁以前のように一号二～三篇の掲載論文ならばそれも可能でありますが、最近のように毎号六～七篇のいずれ劣らぬ力作が各科からよせられますと「純粋学術的」な判定というようなことがいかにむなしい、とらまえどころのないものであるかということが――委員の不勉強を棚に上げて――痛感されます。いつそこんなことに精力を費すよりは前記のように定め、委員会は論文の取捨選択に全力をそそいだ方が生産的であり、部分的には日本社会に根づよく残つている年功序列的思想を打破する上で合理的である――というのが私たちの結論です。会員の皆様の中には或いは唐突な感じをお受けになる方もいらつしやるかと思いますが、委員会としては増頁以後二年間検討に検討を重ねてきた問題であり、最善ではないにしても、現在の会のあり方を最も素直に反映した前進的な性格をもつものと確信しています。今後は、掲載論文の内容についていよいよ重くなる責任を自覚し、一同大いに奮励するつもりでありますので、皆様の強い御支持と御理解をお願いする次第です。

力作の御投稿をお待ちして居ります。

（朝尾直弘）

史林投稿規定

◇資格　本会々員に限る。
◇原稿の長さ
○研究論文　四百字詰五〇枚程度
○研究ノート　四百字詰五〇枚以内
（以上には、四百字以内の要約二通〔一通は英文要約用〕添付のこと）
○資料紹介　随意
○学界動向　四百字詰三〇枚程度
○書評　四百字詰二五枚以内
○紹介　四百字詰三枚以内
◇〆切　毎偶数月末

一九六〇年一二月二五日印刷
一九六一年一月一日発行　定価一八〇円
史林（第四四巻第一号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所　史学研究会
振替京都五一五五番
理事長　宮崎市定
編集主任　赤松俊秀
印刷所　京都市下京区西七条御所ノ内東町三九　中村印刷株式会社